翻　訳

50 年来の中国社会学

――1898 年から 1945 年まで――

孫　本　文　著
星　　明　訳

〔訳者まえがき〕

本訳稿は，孫本文の「五十年来的社会学」(1)（1945）を全訳したものである。孫は，厳復が 1898 年に H. スペンサーの *The Study of Sociology* の前 2 章を訳して『国聞報』(2)に掲載した時から，1945 年に自らの「50 年来的社会学」が『五十年来的中国』に掲載された時まで，すなわち清朝末期から中華民国 30 年代までのほぼ 50 年間を，1 期：萌芽期，2 期：発達期，3 期：成長期の三つに区分して論じている。

中国の社会学は中華人民共和国の建国後，1950 年から徐々に調整され，1957 年には教育も研究もタブーとされ，その後再建されたのは 1979 年 3 月であった。したがって，孫本文はここで中国社会学の廃止前の約 50 年の歴史を論じていることになる。

われわれは，この論考から中国社会学の起源，発達，成長，当時の各種の研究傾向および当時の今後取るべき道程について具体的な事実をとおして知ることができる。

ただ残念なことに，孫本文がこの論考を書いたほぼ 4 年後に中国から社会学は漸次廃止されていった。

フランスの A. コントが社会学の領域を明示し，かつ社会学という学名をはじめて造語し，社会現象の研究が他の科学から完全に独立したのはわずか 100 年前のことであり，社会学が中国に輸入されてから 50 年も経っていない。これ以前，中国はもちろんまだ社会学を知らなかったが，その時に世界各国でもまだ一般の学者の注意を引くものではなかった。したがって，この時期に世界で社会学の著名な学者は数えるほどしかおらず，人びとによく知られ親しまれている重要な著述は，まだ 6, 7 種類にすぎなかった。たとえば，コントの『実証哲学』（1830-1842），H. スペンサーの『社会静学』（*Social Statics,* 1850），『社会学研究』（*The Study of Sociology,* 1873）および『社会学原理』（*The Principle of Sociology,* 1876-1896），L. F. ウォード

の『動的社会学』（*Dynamic Sociology,* 1883），L. グンプロヴィッチの『社会学大綱』（*Grundriss der Soziologie,* 1885），A. W. スモールと G. E. ヴィンセントの『社会研究緒論』（*An Introduction to the Study of Society,* 1894）などにすぎない。しかし，1894年以後，人材が次第に豊かになり，著作も次第に多くなった。20世紀以降，進展はとりわけ早かった。わが国の社会学については，これまで50年間，西洋の学問を紹介することから，次第に自力による建設へと進んできた。おおよそ歴史を全体的にみれば，ほぼ3期に分けることができる。すなわち，1期は萌芽期，2期は成長期，3期は成長期である。

一　中国社会学の萌芽期

この時期は社会学がはじめて西洋から輸入されてから清末までの約13年間である。その発展の経過は極めて緩慢のようにみえる。少数の訳著の発行ならびに学校の課程に取り入れられたことを除いて，一般のひとには注意を払われなかったが，しかし，中国の社会学の基礎はすでにこの時期に築かれた。

（一）社会学の語源

社会学ということばはわが国では「群学」あるいは「人群学」と訳され，「社会学」という名前はやや後になってでてきたようである。最初，厳復氏がスペンサーの『社会学研究』の前2章を訳して，清の光緒24（1898）年に『国聞報』に発表した時，すでに群学の名を用いたようである。29年5月に『群学肄言』のすべてが出版されるに至って，「群学」ということばがはじめて正式に成立した。梁啓超氏が28年に著した『功利主義泰斗ベンサム之学説』，『格致学沿革考略』，『論学術之勢力左右世界』の3書のなかにはいずれも「群学」の名があり，政治学，生計学（経済学），倫理学，法律学などと合わせて列挙している。同じ年の著「進化論革命者頡徳（Benjamin Kidd）之学説」[3]のなかにはさらに「人群学」の名もあり，また史学，政治学，生計学（経済学），宗教学，倫理学などと合わせて列挙している。結局「群学」の二文字は厳氏が創ったのか，それとも梁氏がつくったのかはすでに答えることができなくなった。時系列でいえば，厳氏がはじめて『社会学研究』を訳した時，このことばを創ったかも知れないが，これももう究明できなくなった。しかし，厳氏は書のなかで，「社会」と「人群」の二つのことばについて，区別を行なっている。『群学肄言』の訳者あとがきのなかで，「荀子は，人間には生まれつき集団になり，集団にならないと人間は生きていけない。集団には無数の種類があり，社会とは法に則った集団である」という。また，「西洋の社会の概念では，人間が一定の規則と組織をもっているのが社会だという」という。また，厳復訳の『社会通詮』（E. Jenks, 1900, *A History of Politics*）の第1ページで「社会とは，群居の人間が守る共通の約束があり，徐々に共通の境界を形成する。これゆえに偶然に集まった人びとが多くても，社会では

ない」という。『群学肄言』の序文のなかで，「群学とはなにか，科学の法則を用いて，民衆の変化を観察し，過去を明らかにして，将来を予測するものである」という。厳氏は「社会」より「群」を広くみなしていることがわかる。「群」とは一般の人びとの集合のことをいい，「社会」とは組織をもつひとの集団のことをいう。また，梁氏はうえで引用した「頡徳之学説」のなかで「社会」の二文字の後に，「即人群」の三文字の注がしてあり，厳氏の意見と少し食い違いがあるようである。

「社会学」の名称となると，光緒28（1902）年8月に章炳麟氏が日本人岸本能武太氏の『社会学』を訳したことにはじまる。これ以後この名称があまねく用いられ，「群学」ということばはもはや使われなくなった。

（二）社会学の著述の紹介

ヨーロッパには1830年にすでに社会学があったが，中国には遅れて清の光緒24年，すなわち1898年なってはじめて厳復によってスペンサーの『社会学研究』のなかの前2章が翻訳され，『国聞報』に発表された。すなわち，いまから46年前に，はじめて西洋の社会学が中国に輸入された。しかし，訳は全体のわずか2章，すなわち貶愚（Chapter1 Our Need of it）と倡学（Chapter2 Is There a Social Science?）だけであり，光緒28年になって全16章がようやく完成した。29（1903）年5月になって『群学肄言』の名前で初版が刊行された。厳氏は西洋の社会学を紹介し，中国に導入した最初のひとと思われる。しかし，翻訳本となったものを調べると，『群学肄言』出版の1年前，すなわち光緒28（1902）年に章太炎（炳麟）が日本人岸本能武太の『社会学』を訳したものもある。この著の原書は1900年に出版され，訳書は1902年8月23日に発行された。この書は上下2冊に分けられ，字数は5万字余りで，内容は序論と本論の二つの部分に分かれている。序論は社会学の定義，社会学の研究方法，社会学とその他の科学の関係（ママ）などが記述されている。本論は6章に分かれ，最初に原始時代の人びとの状態を論じ，順次社会と環境の関係，社会の起源の各種の学説，社会発達の原理，社会の性質を述べ，最後に社会の目的を述べている。この書の見解はほぼスペンサーとギディングズの二人の理論を総合しており，したがって章氏は序文のなかで岸本のこの書は「大意を摘かむことに抜きんでており，スペンサーとギディングズを合わせて取りいれている」と称賛している。また，「岸本氏のこの本は総合的にいえば，中庸を重んじている」ともいっており，この書のあらましがわかる。その他にまだ日本人有賀長雄の著『増補社会進化論』（1890年，牧野書房）が上海広智書局の翻訳書にあるが，訳者の氏名がなく，1902年6月7日の発行で，70ページにすぎない（ママ）。序文によれば，これは群学（ママ）の第3部である。その第1部は群体進化論（ママ）（1884年，族制進化論か，東洋館書店，星）であり，第2部は宗教進化論である。ほぼスペンサーの原理に基づいて増補したものであり，ただし社会学の全部とはいえない。

光緒29（1903）年の出版の社会学書は，『群学肄言』以外に，なお三冊が考証できる。1冊目は呉建常氏が訳した『社会学大綱』で，同年正月の出版であり，日本人市川源三の日本語の本を訳したものであり，原書はギディングズの『社会進化論』（*The theory of socialization,* 1897）である。この書はもともとギディングズの『社会学原理』（*The principles of sociology,* 1896）の概要であり，原理とともに大学で使われるテキストとして供された。したがって，ページ数は至って少ない。2冊目は馬君武氏が訳したスペンサーの『社会学原理』（*The principles of sociology,* 3vols, 1876-1896）のなかの第2巻『社会学引論』（Part II. The Inductions of Sociology）であり，約7万字で，書名は『社会学原理』である。同年6月28日の発行で，2章に分けられており，少年新中国叢書第5種にあげられている。全体は社会の本質の探究であり，スペンサーの社会有機体論の説明である。3冊目は上海作新社編訳の『社会学』であり，この年7月の出版であり，訳者の氏名がなく，訳は日本語からと思われる。全体は198ページであり，内容は筋道がよくとおっており，すこぶる貴重である。

これ以外にまだ『社会学原理』があり，光緒29年6月17日付けの『国民日日報』に広告がみられる。全書約9万字余りで，その出版日は厳氏の『群学肄言』の前のはずである，というのも広告のなかに「久しく国内で歓迎されている」という字句があるからである。しかし，著者の氏名および書の内容はいまだに考証できるものがない。

次に，宣統3（1911）年に欧陽鈞が翻訳編集した『社会学』の凡例のなかで，「有賀，浮田，岸本の三氏が論ずる社会学は，前後してすでに翻訳書がある」といっている。現にあるのは，岸本の書以外は，有賀の書は『族制進化論』であるかもしれない。また，浮田の翻訳本はまだみつかっていない(4)。しかし，当時すでにこの訳書があったことは疑いないだろう。欧陽氏の書については，日本人の遠藤隆吉の社会学の講義録に基づいており，かつまたその他の著作を参考にして，翻訳編集した書である。全体は146ページで，社会学の諸問題を概説しており，その説はギディングズとかなり近い。凡例のなかで，「遠藤先生が主張しているのは，ほぼギディングズ氏を根本にして，心理を重視しており，一方，物理の世界から脱することもしていない」といっている。直ちにその趣旨がわかる。これはおそらく萌芽期の最後の一冊である。これからわかるように，辛亥革命以前，わが国の社会学の著作はこのような数冊にすぎない。

（三）社会学課程の設置

わが国の学校のなかでの社会学課程の設置は，光緒32（1906）年12月20日公布の「奏定京師法政学堂章程」がもっとも早い。この章程の正課の政治門の第1学年課程表のなかに社会学が2時間ある。宣統2（1910）年11月の「改訂法政学堂章程」のなかの政治および経済門の課程表のなかの第1学年にすべて社会学が2時間ある。同年，京師大学堂が作成し，提出した分科大学の第1学年の学科課程表のなかの法政大学政治学門の第1学年課程時間割表

の説明事項の第四条によると，「社会学，政治地理および倫理学はいずれも政治諸学科と極めて関連がある」，「いずれも補助課程に授業を増やすことを立案した」という。宣統3年6月，京師大学堂が改正した法政科課程表補助課のなかの第3学年には，社会学が2時間ある。当時，これらの課程は実際に開講されたのか，まただれが教えたのか，どんなテキストを使ったのか，テキストを翻訳編集したのかはここしばらくいずれも考証できない。

同じ時期に，その他の学校で社会学課程を設置したのは，現在わかっているのは，聖約翰大学（St. John's University）のみである。この大学は光緒34（1908）年に社会学課程を開設し，アメリカ人教授孟氏（Arthur Monn）が担当し，白芝浩（Walter Bagehot）の『物理と政治』（*Physics and Politics: Or Thoughts on the Application of the Principles of Natural Selection and Inheritance to Political Society,* 1873）がテキストとして使われた。

うえの各方面からみれば，まさにこの時期の社会学は西洋から輸入され，わずかに『群学肄言』などの訳書が数種あっただけである。学校の課程では，わずかに法政学堂および法政科大学などの学校が普通社会学の科目を開設していただけである。この萌芽期には，社会学を研究する者は極めて少なかったのも無理はない。

二　中国社会学の発達期

この時期は民国元年から19（1930）年の中国社会学社の成立までである。辛亥革命以後，国体が変わり，全国の人民の耳目が一新した。欧米の新思潮が続々と輸入された。社会思想が知識人に重視され，その後「五・四」運動以後にさらに盛んになった。ここで書籍，刊行物，課程および研究のそれぞれを述べると以下のようである。

（一）社会学の翻訳書，著書の隆興

民国初期，各種の新聞や雑誌が次第に社会思想に関する文章を発表した。社会学の範囲でいえば，社会学序論の類の書以外に，たとえば社会進化，社会問題などの書籍もまた次第に増えてきた。ここに比較的重要なものを以下にあげ，一端をみてみたい。

民国4（1915）年　薩端訳（有賀長雄か[5]，星）『社会進化論』（『社会進化論』，東京・東洋館，1883）。

民国6（1917）年　厳恩椿著『家庭進化論』。

民国9（1920）年　趙作雄訳　C. A. エルウッド『社会学及現代社会問題』（*Sociology and modern social problems,* 1919），呉旭初訳　ル・ボン『群衆心理』（*Psychologie des foules,* 1896）

民国10（1921）年　易家鉞著『社会学史要』，盟西訳高畠素之『社会問題詳解』。

民国11（1922）年　伏蘆訳　B. ラッセル『社会構造学』（*Science of social structure*，発行年不詳・星），陶孟和著『社会與教育』，趙廷為・玉造時訳　C. A. エルウッド『社会問題』（*The*

social problem: a reconstructive analysis, 1922）。

民国12（1923）年　蔡和森著『社会進化論』，陶孟和・瀋怡・梁綸才訳　Franz Cart Müller-Lyer『社会進化史』（*The history of social development,* 1920），陶孟和著『社会問題』，常乃恵著『社会学要旨』，朱聚仁著『社会学大綱』，延年著『社会学入門』，顧復著『農村社会学』，張鏡予編『沈家行社会調査実況』。

民国15（1926）年　瞿世英訳　E. S. ボガーダス『社会学概論』（*An introduction to the social sciences,* 1913），許徳珩訳　E. デュルケム『社会学方法論』（*De la division du travail social,* 1893），馬超俊著『中国労工問題』，呉應図著『人口問題』，武堉幹訳　Harold Cox『人口問題』（*The problem of population,* 1859）。

民国16（1927）年　孫本文著『社会学上之文化論』，『社会問題』。

民国17（1928）年　朱亦松著『社会学原理』，孫本文著『社会学ABC』，『人口論ABC』，徐逸樵著『社会思想史』，王平陵著『社会学大綱』，楊濂訳（ママ）（楊廉訳または楊杏佛校か・星）R. M. Binder『主要社会問題』（*Major Social Problems,* 1920），潘光旦著『中国之家庭問題』。

民国18（1929）年　孫本文著『社会学的領域』，『社会的文化基礎』，『社会変遷』，『文化與社会』，呉景超著『社会組織』，『都市社会学』，『社会的生物基礎』，楊開道著『農村社会学』，『社会研究法』，潘菽著『社会的心理基礎』，游嘉徳著『人類起源』，黄凌霜著『社会進化』，楊東蓴訳（ママ）（張栗原と共訳か）　L. H. モーガン『古代社会』（*Ancient society: or, Researches in the lines of human progress from savagery through barbarism to civilization,* 1877），許仕廉著『文化與政治』，『国内幾個社会問題討論』，陳達著『中国労働問題』。

以上の各書は，18年間に出版された社会学の重要な著作物であり，そのなかの一部は西洋の書籍からの翻訳，一部は中国人の著作であるが，次第に発展している状態もおおよそわかる。各書の内容はたいてい欧米の社会学の紹介と社会問題の詳細な研究であって，まだ自力で創造はできなかった。これがまさに発達時期の特有の性質である。

（二）社会学の定期刊行物の出版

わが国のもっとも早い社会学の定期刊行物といえば，まず民国11（1922）年に余天休氏が中心となって編集した『社会学雑誌』（*The Chinese Journal of Sociology*）隔月刊誌をあげなければならず，商務印書館の出版である。11年3月から14年8月まで全部で2巻，計8冊刊行し，そのうち合刊号が全部で3回あった。19年1月に再び西安中山大学で第3巻第1号を出版したが，ページ数は少なかった。第3号はまた済南斉魯大学に移って出版された。まもなくまた停刊した。次は許仕廉氏が編集した『社会学界』（*THE SOCIOLOGICAL WORLD*）(6)があり，16（1927）年6月に第1巻を年刊で出版し，燕京大学社会学会編集の表記があるが，第10巻で停刊した。さらに，孫本文編の『社会学刊』(7)（*The Journal of Sociology*）が季刊で，18（1929）年7月に創刊された。第1巻は東南社会学会編であり，第2巻以後は中国社会学

社に変わった。1937年4月に第5巻第3号まで出版されたが，抗日戦争が起こったために一時休止した（11年後の1948年1月に第6巻合刊として復刊されたが，これを最後に中断された，星）。全部で延べ19冊が出版された。

これ以外に各大学によって出版されたもの，たとえば中央大学の『社会学専刊』（すなわち中央大学半月刊第1巻第14期），大夏大学の『社会学期刊』，復旦大学の『社会学半月刊』，中山大学の『社会研究』などは，ただ1期出版しただけか，中途で停刊したかもしれない。いずれも，重要な貢献はしていない。

（三）社会学の課程および学部の設置

民国元年（1912）京師大学が国立北京大学に改められ，その文科中国哲学門および西洋哲学門はいずれも社会学の課程を設けた。しかし，実際には民国5（1916）年に最初の社会学クラスがはじまり，康宝忠教授が自ら編集したもので講義し，学生に印刷配付した。現在の考証によると，中国人自らが社会学を講義した最初である。わたし（孫本文）が社会学を学んだのは，実際この時にはじまる。次に滬江大学が民国2年に社会学課程を設けて，すべてアメリカ人教授によって担当された。D. H. Kulp II（葛学溥），H. S. Bucklin（白克令），J. A. Dealey（狄来）らであり，すべてブラウン大学の教授で，短期的に中国で教育に就いた。Kulp II は民国6年に大学の近くに「滬東公社」という上海楊樹浦一帯の労働者の福祉組織を創設したし，Bucklin は民国11年に沈家行社会調査を主宰したが，これはどれも社会学課程を創設した成果であった。清華学校は民国10年にはじめて社会学課程を設け，アメリカ人の C. G. Dittmer（狄德曼）が担当した。厦門大学は民国10年に歴史社会学部を設置し，徐声金氏が主宰した，これは中国人自らが経営する大学での最初の学部の設置である。また燕京大学もこの時に社会学部を設置し，アメリカ人 J. S. Burgess（歩済時）が主任となった。Burgess は民国7, 8年ごろ，S. D. Gamble（甘博爾）と北京調査を主宰したが，これは国内で最初の大都市調査であった。復旦大学は民国10年ごろ，すでに社会学課程があり，民国14年に社会学部を設置した。大夏大学は民国16年に社会学部を設置した。国立中央大学は南京高等師範時代にすでに社会学課程を設けており，朱進之氏が担当していた。民国17年にはじめて社会学部を開設し，蕭純綿氏が主宰し，18年は孫本文が主宰した。

全国を総合していえば，民国19（1930）年に中国社会学社が成立した時，各大学で社会学部を開設していたのは合計11校であり，歴史学と併設していたのは2校，政治学との併設は2校，人類学との併設は1校であり，合計16校があった。

（四）社会学の学術団体の組織

中国社会学界の団体の組織は，民国11（1922）年に余天休が発起した「中国社会学会」がもっとも早い。しかし，当時は研究者が非常に少なかったので，会務はまもなく中断した。民

国17年になり各大学で社会学を研究するひとが次第に多くなり，みんなが団体を組織する必要を感じた。そこで，孫本文氏は呉景超，游嘉徳らと連絡をとって「東南社会学会」を創設した。東南各省の大学の社会学教授，学生を会員とした。『社会学刊』季刊をこの会の定期刊行物として第1巻を民国18（1929）年に刊行し，翌19年2月に東南社会学会を「中国社会学社」に改組し，そこではじめて全国的な共同組織ができた。

（五）社会学の実地調査と研究

わが国の社会情況についての実地調査と研究は，この期間にすでにはじまっていた。民国3, 4年の間に北京社会実進会が人力車夫の生活調査を行なったことがある。民国6年，清華大学教授のDittmerがこの学校の近隣住民の生活状況を調査した。民国7, 8年に燕京大学教授のBurgess, Gambleが北京調査を行なった。およそ同時期に，滬江大学教授Kulp IIの広東潮州鳳凰村の調査，金陵大学（ママ）教授J. L. Buck（白克）の蕪湖付近の農家の生活調査がある。やや後に，滬江大学Bucklin教授の沈家行社会調査もある。およそこれらの各調査は，たいてい各大学の教授が学生を指導して行なわれ，いずれも学部生の訓練の性格をもっており，最初から特別の実用的な目的をもったものではなかった。特別な実用的な目的をもって行なわれた社会調査は，すべて学校以外で行なわれた。中華教育文化基金会理事会が北平に設けた社会調査所が，民国15年に誕生した。陶孟和が主宰してかつて北平手工業労働者，北平旧式手工芸労働者，塘沽労働者生計，天津絨毯工場，天津労働者家庭生計，上海織物工場労働者家計，華北鉄道労働者賃金，天津製粉工場労働者賃金，華北紡績労働者賃金などを調査した。その調査報告は，大概中国語と英語でそれぞれ印刷されており，また『社会研究』月刊（後に季刊に改められた）および『社会科学雑誌』という二つの刊行物が発行された。この調査所の仕事はおおむね労働者の生計調査に目を注いでおり，社会生活の全容にはあまり注意していない。しかし，えられた資料はすべて極めて実際に適合しており，参考に供することができる。

次に国立中央研究院社会科学研究所が社会学組を設け，民国17年に王際昌氏の主宰ではじまった。はじめて社会学的方法を採用して，上海社会の研究をすることを立案した。第一段階の調査を行なったが，まだ発表されていない。陳翰笙氏が主宰を引き継いでから，方針が変わり，農村経済調査にとくに力を入れた。すでに『黒龍江流域的農民與地主』，『畝的差異』，『難民的東北流亡』などの報告がある。

（六）この時期の概観

ほぼ中国の社会学は発展時期に至るまでに，すでに次第に未確定から確定へ，散漫から集中へ，紹介から創作へ，非科学的なものから科学的なものになった。生物と同じように，次第に胎児から成熟した，まさしく中国社会学の発展史上の重要な段階である。

（中国の）社会学の知識のルーツについていえば，最初厳復訳の『群学肄言』以外は，たい

てい日本の訳や著書を紹介する時期であり，「五・四」運動以後にアメリカの著作を紹介する時期になり，最後の数年でヨーロッパの著作の紹介が次第に盛んになった。社会学研究の性格についていえば，前期はただ日本および欧米各国の著述を翻訳するだけであり，後期になり個人の著述が発表されはじめた。実際の調査報告に至っては，最後の数年になってはじめてでてきた。社会学の著作の内容についていえば，この時期に，世界各国の名著について，まだ系統的な翻訳は乏しかった。個人の著作は，たいていは欧米の学説の紹介であり，特別なオリジナリティーは少ない。内容の入手は往々にして選択にあまり注意せず，翻訳書あるいは紹介する著作になってしまい，大きな価値はないかもしれない。ヨーロッパの目新しい思想を抜粋して，この思想に社会学の名前を冠して，耳目を混乱させていることさえある。これは確かに社会学の不幸である。純科学的な社会学の著作に至っては，まだ極めて稀で珍しく，多くみられない。

三　中国社会学の成長期

この時期は中国社会学社成立の日からはじまる。前の時期に，およそ欧米の重要な著作および主要な学説は，いずれも相当の翻訳と紹介があり，つまり社会学上の各種の研究方法とすべての領域が翻訳，紹介され，いずれも相当の理解があった。全国の著名な大学はおおむね専攻科を設けて人材を育て，社会研究機関もまた相当な準備と仕事がある。しかし，それぞれ独自に行ない，まだ各方面の連携を欠いていた。中国社会学社の成立後，全国の社会学者の力量が合わさり，社会学理論を共同で研究し，社会の実際の状況を分析し，さまざまな社会問題を討議し，これをとおして中国社会学ははじめて新たな時期に入った。

この時期はすでに 14 年が経過したが，途中で外国の侵略を経験して，進歩は緩慢である。しかし，その成果も述べないわけにいかない。

（一）訳書，著書について

この時期に出版された社会学の書籍の数量はもとより増えたし，また内容も比較的進展した。それらは五つあげることができる。

一，理論方面では内容が充実した系統的な著作があらわれはじめた。たとえば，孫本文編の『社会学大綱』は，9 人が力を合わせて完成した 90 万字余りの著述で，全部で 1,000 ページ余りあり，わが国の社会学の文献のなかでもっともページ数の多い書籍である。次は孫氏が著した『社会学原理』であり，26 章 717 ページ，48 万字で，商務印書館大学叢書に入れられており，わが国で自著によるページ数が最長の系統的な最初の書籍である。現在，教育部によって大学用図書に採用され，28 章に増補され，改訂され重版されている。次に應成一著の『社会学原理』は民智書局出版で，議論は当をえているとは限らないが，いっていることはかなり理

がある。

二，実際方面ではわが国の資料を重視した著作物があらわれはじめた。たとえば，陳達の『人口問題』，許仕廉の『人口論綱要』，柯象峰の『現代人口問題』と『中国貧窮問題』，呉景超の『第四種国家的出路』，李景漢の『中国農村問題』などの書である。たいていわが国の各種の統計資料を引用しており，内容は相当充実している。前の4書は大学向けのテキストとして使える。孫本文著の『現代中国社会問題』は最近出版されたが，範囲は比較的広範で，内容もまた相当詳細である。この書は，引用しているわが国の歴史および統計資料が他の書より多く，昨今の中国人自身が書いた社会問題の著作と比較してもっとも充実しているものである。全体は4冊にわかれ，計34章1,044ページで，商務印書館の「大学叢書」に入れられている。

この他の実際の社会調査方面では，少なくない優れた著作がでてきた。李景漢の『定県社会概況調査』，陳達の『雲南呈貢県人口普査初歩報告』，呉澤霖らの『鑪山黒苗的生活』，呉澤霖らの『民族学論文集』，柯象峰の『西康社会之鳥瞰』，龍冠海編の『社会調査集刊』，費孝通の『江村経済』と『禄村農田』，張子毅の『易村手工業』，徐益堂の『雷波小涼山之儺民』および社会部統計処編の『北碚社会概況調査』，『成都社会概況調査』などはすべて実地調査の報告であり，各地の社会生活の真相を描写したものである。

三，研究方法の方面では，比較的詳細かつ現実に適合した著述の出版がはじまった。たとえば，言心哲の『社会調査大綱』，李景漢の『実地社会調査方法』，毛起鶏の『社会統計大綱』および社会部統計処編の『社会調査與統計』第1号などは，研究方法上すべて相当貢献がある。

四，社会事業と社会行政の方面に各種の刊行物の出版がはじまった。社会部の成立後，社会事業と社会行政の研究が次第に一般の社会学者の注意と関心を引き起こし，ほとんど社会学の今後の応用の主要な方向はここにあると思われる。したがって，この方面の著作は以前非常に少なかったが，最近次第に増してきた。たとえば，言心哲編の『社会事業與社会建設』，馬宗榮の『社会事業與社会行政』，呉楡珍編訳の『社会個案工作方法概要』，柯象峰の『社会救済』，林良桐の『社会保険』，陳達，孫本文らの『社会行政概論』などはだいたい社会部研究室編纂であり，他の書籍も継続してまもなく出版されるであろう。

五，文献の翻訳の方面では，ページ数が比較的多い文献がでてきた。たとえば，黄凌霜訳のP. A. ソローキンの『当代社会学学説』（1935年訳）（*Contemporary sociological theories,* 1928），胡澤訳のL. T. ホブハウスの『社会正義論』（*The elements of social justice,* 1922），王力訳のE. デュルケムの『社会分工論』（*De la division du travail social,* 1893），張世文訳のR. M. マッキーヴァーの『社会学原理』（1933年訳），高達観訳のC. ブーグレとJ. Raffaultの『社会学原理』（1936年訳）（*Éléments de sociologie: textes choisis et ordonnés,* 1930），黄凌霜訳のT. Abelの『徳国系統的社会学』（1932年訳）（*Systematic Sociology in Germany,* 1922），楊堃訳のMarcel Déatの『法国現代社会学』，費孝通訳のW. F. オグバーンの『社会変遷』（1935年訳）（*Social change with respect to culture and original nature,* 1923），B. K. マリノフスキの『文化論』，R.

W. ファースの『人文類型』，呉澤霖と陸徳音訳の Frank W. Blackmar と John Lewis Gillin の『社会学大綱』（1937 年訳）（*Outlines of sociology,* 1915），鐘兆麟訳の E. S. ボガーダスの『社会思想史』（1932 年訳）（*A history of social thought,* 1929），ソローキンの『社会変動論』（1933 年訳）（*Social mobility,* 1927），C. ウィッスラーの『社会人類学概論』（*An introduction to social anthropology,* 1929），C. A. エルウッドの『文化進化論』（1933 年訳）（*Cultural evolution: a study of social origins and development,* 1927）そして李安宅訳の K. マンハイムの『知識社会学』（1944 年 訳）（*Ideologie und Utopie,* 1929 英訳 *Ideology and Utopia: an introduction to the sociology of knowledge,* tr. by L. Wirth & E. Shils, 1936）などはすべてこの時期の成果である。

（二）課程について

この期間中に，各大学の社会学部の課程が次第に充実してきた。しかしその間にはかつてこの学問に対する社会の誤解によって，いくつかの大学の社会学部はすぐに廃止された。国民政府社会部の成立以後は，社会事業と社会行政の仕事の要員に対する需要がはなはだ高くなったので，そこで各大学の社会学部はにわかに発展の様相を呈して，課程を調整したり，講座を増設したりした。もともと理論的探究を重視するものもまた実用課程を開いて，需要に応じなければならなかった。同時に，国民政府教育部は民国 27（1938）年に大学各学院課程を公布し，社会学を文，理，法，師の 4 学院の社会学科学類の共通必修科目の一つに規定した。そして，社会学ははじめて各大学が重視するようになった。規模が比較的大きな大学は社会学クラスの選択学生は常に数百人を超えている。社会学はすでに一般学生に次第に普及していたことがわかる。民国 33（1944）年秋，教育部は再び大学課程改訂会議を開催し，社会学部の課程のなかに社会行政クラスを増設し，これをもって課程の内容はさらに完備した。

（三）学術団体について

中国社会学社の成立後，まもなく全国の社会学者が協調して結束するようになった。規約どおりに毎年，年大会を 1 回開催した[8]。第 1 回大会，すなわち成立大会が民国 19（1930）年 2 月に上海で開催され，10 編余の論文が口頭発表され，また蔡孑民（蔡元培）先生に「社会学と民族学」と題する講演を願った。第 2 回大会は民国 20 年 2 月に南京で開催され，20 編余りの論文が口頭発表され，「人口問題」が集中的に討論された，またアメリカの人口学の専門家 W. S. Thompson（湯卜遜）に「都市人口の発展」の講演を願った。この年の論文は年刊に編集され，『中国人口問題』と題して世界書局から出版された。第 3 回大会は外国の侵略によって 22 年の秋に変更されて，北平で開催されて，20 編余りの論文が口頭発表された。第 4 回大会は 23 年 4 月に上海で開催された。第 5 回大会は 24 年 4 月に南京で開催された。第 6 回大会は 26 年 1 月に上海で開催された。それから抗日戦争が激しくなり，会員は各地に分散した。当分の間，集会をもつことが難しくなったので，32 年 2 月にはじめて重慶，成都，昆

明の三か所で同時に第7回大会を開催し，「戦後の社会建設」を中心テーマにした。また，各地の論文の口頭発表は若干であった。この学社の会員の大多数は大学の社会学部に集中しており，少しは政府の職に就いていて，32年2月までに計160人の会員がいる。この社の定期刊行物『社会学刊』は，第2巻から第5巻3号まで発行され，その後抗戦によって暫定的に停刊した(9)。民国33（1944）年1月（ママ），国民政府社会部と当社の合作で，『社会建設』月刊を発刊し，戦時および戦後の社会建設と社会行政を主として議論している。執筆者はほぼ当社の会員である。第1号はすでに発行されている(10)。

（四）調査と研究について

民国19（1930）年以後，各地の社会調査が継続して行なわれて，かなりの成果がある。だいたい，二つに分けられる。一つ目は各大学の社会学部が学生を指導して，訓練を行なう調査である。たとえば，燕京大学の清河鎮社会調査，中央大学の蒋廟村社会調査，大夏大学の望亭鎮社会調査，中山大学の樟林社会概況調査，金陵大学の各地の農村社会調査および近年の雲南大学の禄村田畑調査，昆明労働者調査，金陵女子文理学院の成都付近の各種の社会調査などである。二つ目は大学以外あるいは大学の付設研究機関が行なった調査である，たとえば中央研究院社会科学研究所の河北省北部とチャーハル省の東部の33県の農村概況調査，北平西郊64村社会概況調査，定県平民教育実験区の定県社会概況調査，山東郷村建設研究院の鄒平社会調査，清華大学国情普査研究所の雲南呈貢県人口普査などである。抗日戦争以来，各社会学者は辺境民族の調査に非常に尽力した。たとえば，呉澤霖らが貴州の苗族地区で行なった苗族生活調査，柯象峰らが西康で行なった西康社会調査，徐益堂が雷波小涼山で行なった儸民調査などはみなそれである。純粋社会学の研究の方面では，孫本文の社会学体系の分析，社会心理学体系の樹立，社会学の基本的観点の研究，潘光旦の儒家社会思想の研究，陳定閎の中国古代社会思想の研究，孫本文，李紹定，邵土政らの中国歴代人口比較の研究などがある。

（五）専門用語の整理について

いちばん早く社会学の専門用語の整理と欧文の専門用語の漢訳を行なったのは孫本文氏である。孫氏はかつて民国18（1929）年に社会学上の専門語334語を選定し，『社会学刊』1巻3期に発表したことがある。その後また補充し，孫氏の『社会学原理』の附録のなかで訳語416語を発表した。民国27年，国立編訳館が差し迫って社会学の専門用語に訳名を確定する必要に鑑みて，そこで社会学専門用語（名詞）審査委員会を組織し，孫氏を主任に要請し，また陶孟和，陳達，呉景超，呉澤霖，呉文藻，言心哲，汪少倫，潘光旦，柯象峰，龍冠海，胡鑑民，王政，呉之椿，黄文山，朱亦松，範定九，高達観，張鴻鈞，許徳珩，陳序経，傅西霖，費孝通，李泰華，邵鶴亭ら25人を審査委員に招聘し，共同で審議した。数年の議論を経て，30年春に，編訳館が会議を召集し，最終的に決定された。合わせて1,579語が採用され，英語，フ

ランス語，ドイツ語を付け加えて，すでに編訳館から出版されている。

（六）この時期の概観

中国社会学はなおも成長時期にある。この時期は外国の侵略によって，進歩が緩慢であったが，しかしながら確かに前の時期より勝っている。

一，あらゆる国の社会学の重要な著作の多くの翻訳がある。たとえば，フランスのデュルケム学派，ドイツの形式学派，イギリスのホッブハウス，ギンスバーグ（霍伯浩，靳斯堡）学派，アメリカのエルウッドらの心理学派，オグバーンらの文化学派，イギリスのマリノフスキらの機能学派，E. S. ボガーダス，ソローキンらの社会思想派などの著作がほとんどすでに中国語に訳されている。

二，わが国のデータを採用した自著が次第に多くなってきたし，スケールとページ数も先の時期より大きくなった。

三，大学の課程が次第に充実し，徐々に通常の社会学が一般学生に普及してきた。

四，調査と研究活動が次第に進展し，内容も徐々に確実になっている。

以上の 4 点は，確かにこの時期の 14 年来の成果である。しかし，これはただ成長の前期といえるにすぎない。後期の展開はまだ発展の最中であってその勢いが衰えない状態であり，全国の社会学者の共同努力をまたなければならない。

四　中国社会学の学派とその特徴

以上，われわれは中国社会学の三つの段階を述べたが，これは歴史的な説明である。いま，われわれは現在の国内の各社会学者のふだんの主張と立場を再度分析し，そのなかで中国社会学がすでに学派をもっているか否かをみわけたい。著者個人の見解では，中国社会学はまさに成長期にあり，まさに全国の社会学者が社会学の基礎を建てようと努力しており，やはりなんらかの学派があるとはいえない。いわんや現代の社会学はもともと学派が互いに相容れないものではない。簡単に学派をいえば，あるのは各々長所を尽くして，分業して協力し全体の社会学の使命を達成していることである。多くの社会学者はいつもいくつかの専門に向かい，その後に研究を総合する傾向がある。したがって，われわれは中国社会学の学派が，ただ重視している研究傾向があるにすぎないことを論じた。読者は絶対にそれぞれが受け入れることができない学派だと誤ってはいけない。

（一）社会心理的要素を重視するひと

欧米の社会学のなかで心理学派の著作が中国にもっとも早く輸入され，またもっとも流行した。ギディングズの『社会進化論』が呉建常によって 1903 年に中国語に訳され，『社会学提

綱』という書名で発行された。康宝忠教授が民国5年に社会学を講義した時，ギディングズの「同類意識」の概念を重視した。エルウッドの『社会心理学緒論』，『社会学與現代社会問題』（1920年　趙作雄訳），『社会問題』（1922年　玉造時・趙廷為訳），『文化進化論』（1933年訳）などはいずれも中国語に訳されて，全国に広まった。この他にもル・ボンの『群衆心理』（群集心理）（1920年訳），『民族進化的心理定律』，『世界的紛乱』，『政治心理』などの書，G. ウォーラスの『政治中的人性』（*Human Nature in Politics,* 1908），『大社会』（*The great society; a psychological analysis,* 1924）（訳名は『社会心理之分析』）の2書，W. マクドゥーガルの『社会心理学緒論』（1922年　劉延陵訳），Young, Kimball の『社会心理学史』（1935年　高覚敷訳），F. H. オルポートの『社会心理学』（1931年　趙演訳）などはすべてすでに中国語に訳されている。したがって，この学派の思想を中国人は比較的深く理解している。現在に至るまで，国内の学者で心理的要素を重視しているのは呉澤霖，孫本文らである。呉氏はかつてアメリカに留学し，ウイスコンシン大学の E. A. ロス教授およびオハイオ大学の Lumley, Frederick Elmore（龍烈）教授の弟子であり，呉の著『社会約制』と『社会学與社会問題』の2書はこの傾向をあらわしている。孫氏はアメリカ時代にコロンビア大学のギディングズと Woodworth, Robert Sessions の二人から教えを受け，原始社会のひとの社会心理と社会心理学を研究した。また，シカゴ大学で E. フェアリス，R. E. パークの二人から教育を受け，社会心理学，社会態度および集団行動を研究した。その著『社会心理学』はこの傾向を示している。しかし，孫氏はただ心理的要素を重視するだけでなく，氏は社会現象のなかの心理的要素と文化的要素を同じく重要だと考える。そのうえ社会心理学を社会学の1部門と考え，将来社会学から離れて，独立した科学になる可能性があると考えた。社会心理学を研究したことは，たんに心理的要素を重視するだけでない明らかな証拠である。したがって，純粋な心理学派は中国ではまだだれもない。

（二）社会文化的要素を重視する者

最初に，アメリカの文化社会学派の学説を取り入れたのは孫本文氏である。孫氏はコロンビア大学留学時，アメリカの文化学派の創始者 W. F. オグバーンに教えを受けた。帰国後，民国15（1926）年12月の「アメリカ社会学現状及其趨勢」(11)のなかで，オグバーン派の新しく興った文化学説をあらまし紹介している。16年1月に『社会学上之文化論』，17年に『文化與社会』，18年に『社会的文化基礎』，『社会変遷』などの4冊を出版し，さらにこの学派の学説について比較的詳しく述べている。これ以外にも継続して「文化失調與中国社会問題」，「文化與優生学」，「再論文化與優生学」，「中国文化研究芻議」，「中国文化区域研究」，「中国文化在世界上的地位」，「中国文化建設的初歩研究」などの論文を発表したが，すべて文化理論を展開した論文である。同時に，国内の社会学者で文化の研究を重視するひとは非常に多い。そのもっとも著名なひとは黄文山，陳序経，呉文藻の3氏である。黄氏の「文化学的方法論」，「文

化学的建立」などの論文は，文化の研究を社会学から離して独立した科学にして，いわゆる文化学を樹立しようとしている。陳序経氏は『中国文化的出路』のなかで極力文化の重要性を唱道し，中国文化の活路は，ほかでもなく全面的な西洋化－現代の西洋文化の全面的な受容であると考えた。呉文藻氏は『社会学叢刊』の「総序」のなかで機能主義文化論者の見解を明示した。かれの定則は「現代のコミュニティの核心は文化であり，文化の単位は制度であり，制度の運用は機能である」ということである。したがって，かれは「社会学とはコミュニティの比較研究，文化の比較研究であり，あるいは制度の比較研究である」と考えている。黄，陳，呉の三氏はすべてアメリカに留学したことがある。黄，呉の二人はいずれもコロンビア大学のオグバーンの学生であり，また陳氏もドイツに留学し，ドイツの文化社会学の影響を受けた。イギリスのラドクリフ＝ブラウン教授が中国で講義をしてから，呉文藻氏はいっそう文化の機能についての見解を深めた。呉の学生の費孝通氏が B. K. マリノフスキの『文化論』および R. W. ファースの『人文類型』を翻訳したが，すべて文化機能説を提唱しており，「比較社会学」といった。以上述べた孫，黄，陳，呉，費の 5 氏はわが国の社会学のなかの文化論者の重鎮である。この他に，胡鑑民，凌純声，衛恵林，徐益堂，何聯奎の諸氏も文化の研究を重視している。なかでも凌，衛，徐，何の 4 氏は民族学に対してとりわけ関心をもっており，国内の民族学界の活動的な人たちになっている。

（三）社会の生物要素を重視するひと

生物の遺伝的要因をとくに重視する学者はわが国では潘光旦氏ただ一人である。潘氏はかねがね優生学者として著名であり，その著『人文生物学論叢』はすべて優生学の理論を紹介した著作である。かれは人類の資質は遺伝であると考えている。いわゆる，「数学の能力，絵画の能力，活動能力，碁を打つ能力さえも，いずれも遺伝の根拠をもたないものはない」，「音楽の能力の一端をいえば，われわれはむしろ，人類には先天的に音楽の能力があるので，ひとは適切な物質的環境と意識的な環境のなかでは，音楽的な活動をせざるをえなくなり，次第に音楽的芸術，音楽的文化に染まるといえる」と考えている。これは潘のひとの品格の遺伝についての意見の一部分である。孫本文はかつて民国 17 年に社会科学雑誌に「文化與優生学」という論文を発表して，文化の立場から研究し，優生学の理論は誤っていると考えた。そしてその四つの理由をあげた。すなわち，（一）ひとと動物を同等に扱うという誤りがあること，（二）文化の影響を生物の特性とする誤りがあること，（三）知能検査法は先天的な優劣を十分に判別できるという誤りがあること，（四）富とパワー（勢力）を能力の優劣を判別する基準とする誤りがあること，である。潘氏は「優生與文化」を書き，持論を擁護したことがある。孫氏はまた「更論文化與優生学」で潘と論議した。潘と孫がやり取りした論議の文字数は合計 3 万字余りとなり，『社会学刊』1 巻 1 期に掲載され，わが国の社会学上の理論を詳しく研究する重要な文献をみることができし，かつまた文化の立場と生物の立場の意見の違い，および優生

学の理論的根拠は示されているか否かをみることができる。

（四）全体社会およびその主要な要素を重視するひと

これは総合的な傾向をあらわしている。その要点は社会の全体性およびその各種の要因の複雑さを確認することにあり，かつまた社会学理論の体系を確立しようとする。もともと比較的総合的な見地をもつ社会学の著作は，すでに多くの中国語訳がある。たとえば，E. S. ボガーダスの『社会学概論』（瞿世英訳），E. C. ヘイズの『社会学研究序論』（趙卓甫訳，『社会学綱要』），J. L. ジリンと F. W. Blackmar の『社会学大綱』（呉澤霖訳）などはすべて総合的な傾向を示している。デュルケムの『社会学方法論』（許德珩訳）および『社会分工論』（王力訳）の2書に至っては，社会現象の性質を確認しており，もっとも優れたこの流派の重要な根拠である。C. ブーグレと J. Raffault の『社会学原理』（高達観訳）はさらにデュルケム学派の体系を代表しているだろう。わが国のひとの書でこの総合的見地を代表するのは，孫本文の『社会学原理』を推したい。この書は，社会学は社会的行為を研究する科学であるとみなし，そのうえで全体社会の立場から社会的行為の要素，過程，組織，コントロールおよび変遷を分析した。孫氏は社会的行為の要因は地域環境，生物，心理，文化の四つの面を含むと考え，そして心理と文化の二つの要素に重点をおく。孫氏はこの書の凡例のなかで，「著者自身の見地は，アメリカのオグバーン，トーマス両教授の影響がもっとも大きい。したがって，この書は文化と態度の討論を重視している。しかし，その他の有名なひとの判断については，社会的行為の現象を説明できるものであれば，すべて引用して述べることをもって比較研究とする」といっている。ここから孫は文化的要素を重視するけれども，純粋な文化傾向があるわけでないところに，孫氏の理論的特徴があらわれていることがわかる。欧米の体系的な社会学の著作については，中国語に訳されているのはわずかにアベルの『德国系統的社会学』（黄凌霜訳）の書だけである。孫氏は最近社会学知識の体系化に非常に気を配っている。かれは「社会学が厳格な科学になるためには，必ず社会の内容を厳格な体系的知識とすることが必要である」という。「社会学体系発凡」(12)の一文から，孫の社会学体系の内容を理解できる。また，「社会学的基本観点」(13)からも，孫氏の純理論的社会学の立場を理解できる。

（五）社会問題の研究を重視するひと

わが国の社会学者はほとんど社会問題の研究を重視し，国内で出版される社会学の著作も社会問題に関するものがもっとも多い。たいてい各人の研究関心はつねに多種多様である。陳達氏は労働者と人口問題を重視し，『中国労働問題』と『人口問題』の2著がある。陳氏はとくに優れた労働者問題の専門家として有名である。陶孟和氏は生活水準の研究を重視し，『中国労働者生活程度』，『北平生活費的分析』などの著がある。呉景超氏は人口問題と都市問題を重視し，『第四種国家的出路』と『都市社会学』の2著がある。許仕廉氏は人口問題を重視し，

『中国人口問題』と『人口論綱要』の 2 著がある。柯象峰氏は人口問題と貧窮問題を重視し，『現代人口問題』，『中国貧窮問題』，『社会救済』などの著がある。楊開道，言心哲の両氏はいずれも農村問題を重視している。楊氏編纂の農村叢書は，『農村問題』，『農村社会』，『農村組織』，『農村自治』，『農村政策』，『農村領袖』，『農村調査』，『農村建設』，『農民運動』など 9 冊を含んでおり，まとめると壮大な農村問題と農村社会学の著作である。言氏の『農村社会学概論』と『農村社会学綱要』の 2 著は概論的な性格があるが，農村問題にも触れている。

（六）社会哲学的研究を重視するひと

これは社会学知識の信頼性を追求しようとするものである。朱亦松氏は最近とみにこの傾向がある。かれは中国社会学社第 7 回大会での口頭発表論文「今后社会学的一個可能発展途径」で社会学にはなお 11 件の理論問題があり，われわれの研究をまっていることを示した。結論で，氏は「社会学は必ず社会認識論を基礎とする必要がある」と考えており，朱の思想の傾向をみることができる。また，龍冠海氏も最近社会思想の研究に注意を向け，その論文「西洋社会思想」が間もなく刊行されるが，これもまた社会哲学の範疇に入る。

（七）社会の研究方法を重視するひと

国内で社会の研究方法を重視するひとは少なくない。楊開道の『社会学研究方法』，蔡毓聰の『社会学研究法』および『社会調査之原理與方法』，樊弘の『社会調査方法』などの書は，比較的早期の著作である。続いて言心哲の『社会調査大綱』，黄枯桐の『農村調査』，張錫昌の『農村社会調査』などがある。ちなみに社会調査にもっとも豊富な経験をもつひとは当然李景漢氏を推すべきである。李氏は河北定県で長年仕事をして，この県で数回実地調査を行なったことがある。その著『実地社会調査方法』，『定県社会概況調査』の 2 著および「住在農村従事社会調査所得的印象」などの論文があり，いずれも極めて価値がある。張世文の『農村実地調査経験談』と『衡山社会概況調査』および『生命統計学概論』（訳書）（Whipple, George Chandler, *Vital statistics; an introduction to the science of demography,* 1919），張世文編著『生命統計方法』などは研究方法に対して極めて多くの貢献をした。

上述の七つの傾向からみれば，中国社会学はこの成長時期にすでに相当な基礎があった。しかし，この基礎は畢竟するにかなり脆弱である。このすでにある基礎を固め，成長発展を加速させるには，全国の社会学者の分業協力，共同努力が必要である。ここで今後取り組むべき活動を以下に述べたい。

第一に，中国の理論社会学の樹立。今後社会学者は社会学の中国化を樹立する努力をしなければならない。その重要な活動には三つある。

一，中国固有の社会史料を整理すること。わが国の古書籍のなかには極めて豊富な社会学の資料がある。研究に役立つのは五つである。

（一）社会学説について。およそ先人の社会生活，社会問題についてのさまざまな思想をすべて収集，整理し，時代順に体系的な中国の社会思想史を編製すべきである。

（二）社会理想について。古今の賢哲が発表した社会組織および社会生活についてのさまざまな理想と計画もまた収集，整理し，中国社会理想史を編製すべきである。

（三）社会制度について。歴代の社会制度の性質，機能，状況と変遷およびその相互間の関係をすべて分析し，各種の社会制度史を編製すべきである。

（四）社会運動について。歴代の社会運動の性質，起源，範囲および社会への影響などをすべて分析，整理し，中国社会運動史を編製することを期待する。

（五）一般の社会的行為について。歴代の偉人哲人が発表したよいことばと立派な行ないは十分に社会学あるいは社会心理学の参考になり，極めて豊富である。それぞれ収集できれば，社会の類書に編製して，応用に供することができる。

二，中国社会の特性を実地に研究すること。歴史的材料を整理し，わが国の社会の性質の研究に役立てる以外に，また現実の社会の方面から詳細で精確な調査と研究を行ない，それによってわが国の社会の特性を徹底的に理解すべきである。したがって，今後各地の重要な区域は，計画的に都市と農村の調査を行ない，各種の調査研究報告を編製し，各方面の参考に供すべきである。

三，社会学の基本的書籍を系統的に編集すること。わが国の社会学はすでに40年余りの歴史があるが，しかし社会学理論と応用に関する比較的充実したかつ完全な書籍は多くない。まして，いくつかの部門はいまだ大学のテキスト用書として十分に使える書籍が一つもない。たとえば，西洋社会思想史，中国社会思想史，近代社会学理論，中国社会史，社会制度，民族学，都市社会学発展史，社会事業，社会行政，社会政策，社会立法，社会心理学，近代社会運動などの部門は少数の訳本以外，まだ中国人による適切な参考書はない。したがって，基本的な書籍を編集することがほんとうに急務である。

上述の三つの活動から，われわれはわが国固有の社会の資料を十分収集，整理し，さらに欧米の社会学者の綿密な理論に基づいて，完全に中国化した社会学体系を確立することを望む。

第二に，中国の応用社会学を樹立すること。同時に，他でもなく中国の国情に適合した応用社会学の建設に従事すべきである。その重要な活動は三つである。

一，中国の社会問題を詳細に研究すること。これまでわが国の社会学の書物のなかでは，社会問題の類のものがもっとも多い。しかし，この類の書籍はほとんど西洋の社会問題を論じており，わが国の問題をもっぱら論じているのは極めて少数である。今後全国の社会学者が長所を発揮し，各問題に対して，手分けして詳細に研究し，わが国の社会問題の特質を徹底的に理解することを期待したい。

二，中国の社会行政の討論を強めること。わが国の社会学者はこれまで社会事業と社会行政の研究を重視してこなかったことは否認できない。社会部が成立してから，一般の社会学者の

注意を引きはじめた。今後なんにんかの学者がもっぱらこの方面で努力し，それによってわが国の社会事業と社会行政の実際の状況，およびその発展可能な前途を研究することが相応しい。

三，中国の社会建設のプランを現実に合うように研究すること。今後全国の社会学者は上述の関連する問題，社会事業と社会行政に関する事実に基づいて，社会組織，社会福祉，社会サービスおよび社会運動の各方面から，当面および今後の全国のニーズを詳細に分析し，さまざまな社会改革のプランを慎重に立てて，政府の参考に供すべきである。

上述の三つの方面の努力から，今後社会学者が社会学理論とわが国の社会的事実に基づいて，中国社会のニーズに適合した応用社会学を打ちたて，それによって国家民族の向上発展を促進することを望む。

第三に，社会学の人材の育成。わが国の社会学者の大多数は全国の各大学に集中し，ごく少数が各行政機関に散在している。近年，大学の課程が増加し，社会事業が盛んになったために，ことに人材が不足する恐れがある。国内の比較的充実した大学の社会学部は今後すみやかに青年学者を育成し，各専門でその長所を伸ばして，全国の切迫したニーズに応えるようにすべきである。

以上，われわれはすでに50年来の中国社会学の起源，発達，成長，最近の各種の研究傾向および今後の取るべき道筋について概略を述べてきた。紙面の制限があり，詳細な検討ができなかったがどうか読者の許しを願いたい。

民国33（1944）年11月30日　重慶国立中央大学

注釈（原典に基づくが，原典の本文には番号が付されていない。カッコ内は訳者が挿入した）

1．蔡毓聰，「中国社会学発展史上的四個時期」，『社会学刊』，民国20年，2巻3期。（なお，この訳稿については，星明訳，2023. 3. 1，「中国社会学発展史上の四つの時期」，『社会学部論集』，第76号，佛教大学，pp.67-90を参照されたい）。

2．孫本文，「中国社会学的過去現在及将来」，中国社会学社第1次年刊『中国人口問題』，上海世界書局，民国21年。

3．孫本文，「中国社会学的回顧與前瞻」，中国社会学社第7回年会重慶区特刊，『中央日報』，民国32年2月1日－2日。（この論考は，孫本文の『当代中国社会学』（1948）の「結論－回顧與前瞻」に再録されている。なお，この訳稿については，星明訳，2021，資料「中国社会学の回顧と展望」，『中国社会学史の研究』，一粒書房，pp.110-117を参照されたい）。

4．董家遵，「清末両位社会学的先鋒－厳幾道與章炳麟」，『社会研究』（国立中山大学）。

〔注〕以下の注はすべて訳者（星）によるものである。

(1) 初出は潘公展編の『五十年来的中国』（勝利出版社，1945）に掲載されたものであるが，ここでは『孫本文文集』の第9巻所載の「五十年来的社会学」を翻訳にもちいた（『孫本文文集』，第9巻，2012，社会科学文献出版社，pp.262-279）。この孫本文の論考には，欧米および日本の社会学者や

社会学書籍に関する書誌情報の未記載がかなり多くあるので，Sun, Pen-wen（孫本文）の“Sociology in China”（*Social Forces,* vol.27, no.3, 1949, pp.247-251），孫本文の『当代中国社会学』（勝利出版公司1948年版影印，民國叢書，上海書店），『当代中国社会学』（2011，中華現代学術名著叢書，商務印書館），『孫本文文集』，第3巻，2012，社会科学文献出版社，孫本文の『社会学原理』（商務印書館，1935），中国大百科全書総編集委員会ほか編『中国大百科全書・社会学』（1991），森岡清美・塩原勉ほか編，『新社会学辞典』（1993）およびオックスフォード大学，シカゴ大学の図書館のOPAC，中国の国家図書館，上海図書館，上海社会科学院図書館，日本の国会図書館などのOPACによって補足した。

(2) 『国聞報』は「戊戌変法時期のブルジョア階級の維新派が華北で発行した重要な新聞である。1897年10月26日（光緒23年），厳復，王修植，夏曽佑らが天津で創刊した日刊新聞である。厳復らによって編集された。12月8日から『国聞匯編』（旬刊）が追加された。「上層と下層の気持ちを理解すること」，「国内外の理由を理解すること」を主旨とした。外国の新聞や本の翻訳と紹介を行ない，また記者を国内外に派遣してインタビューし，国民が西洋の学問の知識を向上させることに注意を払った。変法を宣伝し，できるだけ努力するようにした改革派が主宰した最初の日刊紙である。1897年12月から，『国聞匯編』は厳復が訳したT. H. ハックスリーの有名な著作『天演論』（*Evolution and Ethics,* 1893）の翻訳の一部を連載し，自然淘汰，種の保存の原則を説明した。……」（https://www.kekeshici.com/lishi/jindaishi/300411.html）。

(3) 梁啓超，1902，『新民叢報』，18号掲載（韓明謨著・星明訳，2005，『中国社会学史』，行路社，p.64）。

(4) 恐らく原書は，浮田和民講述；帝國教育會編纂，1901，『社会学講義』，開発社であろう。

(5) 孫本文，1948，『当代中国社会学』，勝利出版公司。ここでは，勝利出版公司1948年版の影印本をもちいた（孫本文，2011，『当代中国社会学』，商務印書館，p.64）。

(6) この社会学界の刊行の主旨は編集者のことばによれば，「一つは社会学雑誌の停刊をみて，それを継続する使命を担うためであり，二つは中国の社会学者に中国の社会学の材料を整理する仕事をしてもらって，自国の社会学を研究したい人びとに活躍の場をもたせるためである」（「編輯者言」，1927，『社会学界』，第1巻）。

(7) 東南社会学会紀事の東南社会学会章程二の学会の宗旨によれば，「本会は社会学理論，社会問題を研究し，社会の一般的な利益を研究するための科学的方法の使用を促進することを宗旨とする」とある（「東南社会学会紀事」，1927，『社会学刊』，第1巻第1期，東南社会学会紀事，pp.1-2）。

(8) 孫本文が記述している中国社会学社の年会の開催回，開催日および開催地などについては，次の資料に基づいて一部訂正した。「本社暦年年会簡表（中国社会学社紀事）」，1948，『社会学刊』，第6巻合刊。「中国社会学社概況」，1948，『中国社会学訊』（中国社会学社二十週年紀年暨第九届年会特刊），第8期，中国社会学社。「中国社会学社簡史」，1944，『社会建設』，第1巻第1期（創刊号），社会建設月刊社，p.119。「中国社会学社挙行・第九届年会及成立二十週年紀念大会」，1948，同上，（復刊）第1巻第7期，pp.75-76。許妙発，1983. 04，「旧中国的社会学団体」，『社会（社会学雑誌）』，上海大学文学院《社会》編輯部，p.43。陳新華，2009，『留美生與中国社会学』，南開大学出版社，pp.152-156など。

(9) 社会学刊の第1巻（1929年7月）は東南社会学会から，以後第2巻（1930年10月）から第5巻3期（1937年4月）までは中国社会学社から刊行された。第5巻3期の刊行後，10年余りの中断を経て1948年1月に第6巻合刊として復刊されたが，これが中国大陸での最終号になった。

(10) 『社会建設』創刊号巻頭の「発刊詞」には，「抗戦の勝利が，日一日と近づいている。建国事業をとくに力を入れて進めなければならない。ただ建国事業は，糸口が多く，入り乱れている。全国の各分野の専門家，学者の各方面からの研究と設計がなければ，各事業を同時に円満に進めることができない。本刊の発行の狙いは，全国の学術理論研究の豊富な社会学者および実際の経験の豊富な社

会事業と社会行政の専門家を動員して，共同で戦時および戦後の社会建設に関する各種の理論と実際問題を議論し研究し，社会学理論と社会技術を実際に生かすため，研究者それぞれが個人の立場から，研究でえた収穫を発表することを期待する，これによって建国の偉業に対して，いささかの貢献をしたい。……（中略）……要するに，本刊の使命は，全国の社会学者と社会事業・社会行政の専門家を集めて，社会建設の各理論と実際問題に関して共同で研究することであるが，しかし発刊早々で，欠点も多くあるに違いない。なお全国の諸賢から十分な教えを願うものである」と記されている（孫本文・毛起鶏編集，1944 年 7 月，社会建設月刊社）。

⑾ 『東方雑誌』，23 巻 12 号。孫本文，1948 年，『当代中国社会学』（勝利出版公司 1948 年影印版），商務印書館，2011 年，p.257。

⑿ 孫本文，2011 年，『孫本文文集』第 9 巻，2012，社会科学文献出版社，pp.180-193（原典は『国立中央大学社会科学季刊』，1944 年第 1 巻第 2 期）。

⒀ 孫本文，同上，pp.242-254。

（ほし　あきら　佛教大学名誉教授）
2023 年 3 月 16 日受理